



1. 漆絵鶴丸文椀 浄法寺 江戸時代 18世紀 径13.8cm
2. 漆絵蓬萊文鏡箱 江戸時代 18世紀 径14.2cm
3. 漆絵箔置柏文秀衡椀 桃山～江戸時代 17世紀 径13.3cm
4. 朱漆沈金宝袋型酒器 首里 琉球王朝時代 18世紀 高24.1cm



5. 螺鈿漆絵鍵文菓子箱 江戸時代 18世紀 幅36.0cm
6. 螺鈿卵殻張酒器 江戸時代 18世紀 高21.0cm
7. 色漆塗分盆 江戸時代 18世紀 径26.5cm
8. 漆絵柏文瓶子 室町時代 16世紀 高30.0cm
9. 朱漆方位文盆 江戸時代 18世紀 径35.7cm

開館時間：午前10時～午後5時（入館は16時30分まで）  
 休館日：月曜日（ただし祝日の場合は開館し、翌日休館）  
 入館料：一般1,000円 大高生500円 中小生200円  
 交通：京王井の頭線駒場東大前駅西口から徒歩7分  
 所在地：〒153-0041 東京都目黒区駒場4丁目3番33号  
 電話番号：03-3467-4527  
 西館公開日（旧柳宗悦邸）：  
 会期中の第2水曜、第2土曜、第3水曜、第3土曜日（入館16:00迄）

<http://www.mingeikan.or.jp/>

**日本民藝館**



螺鈿漆絵鍵文菓子箱（部分） 江戸時代 18世紀

2013年

1月10日(木) - 3月24日(日)

月曜休館（祝日の場合翌日休館）  
 10:00-17:00（入館16:30迄）  
 一般1,000円 大高生500円 中小生200円

東京都目黒区駒場4-3-33  
 TEL 03-3467-4527  
 京王井の頭線駒場東大前駅西口より徒歩7分

西館公開日（旧柳宗悦邸、入館16:00迄）  
 会期中の第2水曜、第2土曜、第3水曜、第3土曜日

**日本民藝館**

<http://www.mingeikan.or.jp/>

特別展

日本の漆

南部・秀衡・浄法寺を中心に





漆絵蓬萊文箱  
江戸時代 18世紀 縦 24.0cm



イクパスイ 4種  
アイヌ民族 (北海道) 19世紀



漆皮箱  
江戸時代 18世紀  
高 49.0cm

漆は日本、中国、韓国、東南アジアに分布する漆の木からとれる樹液で、一定の湿度と温度があれば乾固するため、天然の塗料として古来より人々の暮らしに用いられた。江戸時代になると、日本の良質な漆と優れた技を背景に、金や銀の粉を用いた漆器の加飾技法である蒔絵が発達し、漆工芸史において確固たる地位を確立した。

しかし、日本民藝館創設者の柳宗悦 (1889-1961) は、高価で限られた人々にのみ用いられる蒔絵よりも、実用を旨とし広く民間で用いられた漆工芸に美しさを見出した。なかでも、朱か黒かあるいは色漆を用いて直に模様を描いた「漆絵」は「蒔絵に比べて下の品だが、絵の自由さにおいて上をいく」と高く評価し、吉祥文や草花文を活々と描いた椀や盆、酒器などを数多く蒐集している。

特に、南部地方 (ほぼ現在の岩手県) を産地とする南部、秀衡、浄法寺の椀類は「漆絵」の優品が揃い当館の漆工芸を代表している。秀衡椀という呼名は奥州平泉の藤原秀衡に因み後世つけられたものであり、産地等は詳らかになっていない。いずれも時代は桃山-江戸初期に上り、朱漆と切箔による模様が特徴で豊かな形をもつ名椀と称賛されている。また、現在も生漆の産地として知られる二戸浄法寺で庶民向けに作られたのが、堅牢で自由な絵付けの浄法寺椀である。

「漆絵」には、他にも東北地方で「酒上」と呼ばれた片口型の酒器や、神前に酒を供えるための瓶子、黒地に朱漆で素朴な図柄を描いた盆、松竹梅や鶴亀などの吉祥文様を描き嫁入り道具として用いた蓬萊箱などがあり、どの模様も工芸的な魅力を呈している。

その他に、神社や寺院で使用されていた調度類に漆で塗られたものがある。日々の食器として、また、法会などの度に使われる什器として、永く使い続けるよう上等な塗りを施し、かつ実用に徹した簡素な形に仕上げられている。これらの漆器には、根来塗と呼ばれるものも含まれる。根来塗の名は和歌山県根来寺に由来し、長年の使用により、上塗の朱漆が擦れ、下塗の黒漆があらわれてできる自然な模様に趣がある。

また、北海道の先住民族であるアイヌは、交易によって得た漆器を宝物として大切に保管したことで知られている。当館にはアイヌ民族が使用していた浄法寺椀のほか、漆によって彩色された儀礼用の祭器である捧酒箸 (イクパスイ) などがある。また、中国の影響を受け独自の技法を発展させた沖縄の琉球漆器には、酒器や食籠、茶盆、長櫃などがあり、本土の朱とは趣の異なる鮮やかな発色が特徴である。

漆の技法としては、他にも木目を生かした拭漆、鮑や夜光貝を用いた螺鈿、卵の殻で模様を付けた卵殻貼などがあり、素地には挽物の他、刳物、指物、曲物などによる木材が用いられる。また漆は木材のみでなく、竹や紙、革や金属にも塗布することができ、漆の多様な技法と幅広い利用を所蔵品にみる事ができる。

柳宗悦によって蒐集された当館の漆工芸は、そのほとんどが実用を旨として生れ、暮らしに交わってきたものである。人々の永い営みの中で、形や模様を得た漆器には、柳のいう「普遍の美しさ」が宿るといえよう。「日本の漆」という天然の恵によってもたらされた豊かな工芸の世界をご覧いただきたい。

### 記念講演会 漆のふしぎ —古くて新しい未来塗料・うるし

【講師】佐藤阡朗 (漆工家) 日時・2013年2月2日(日) 18:00-19:30  
会場・日本民藝館大展示室 料金・300円 (入館料別) 定員・100名 (要予約)

## 展示室 1 階

### 〔玄関〕 古人形の美

幕末から明治期にかけて、東日本を中心に庶民のために作られた古人形を紹介します。張子細工の三春人形、粘土細工の埴人形や相良人形、紙・木・練物を用いた鴻巣人形等は、素朴ながらも美しい色彩と細やかな表情をみることが出来ます。

### 〔第1室〕 九州の古陶

九州では朝鮮半島をはじめ中国などからの影響を受けながら、各地で様々な窯場が発展を遂げました。今回は、当館コレクションの中核をなす九州陶磁器の中から、特に近世の民窯古陶の優品を展示し、それらが宿す質朴で力強い造形美の世界を紹介します。

### 〔第2室〕 民藝運動の作家達

展示期間：2月1日～3月24日 (1月31日まで閉室)

自然の恵みや伝統の力によって生み出された民藝の美は、今も多くの工芸家達に多大な刺激と影響を与え続けています。今回は、民藝運動に参加した、バーナード・リーチ、濱田庄司、河井寛次郎、芹沢銈介、棟方志功らの館蔵作品を紹介します。

### 〔第3室〕 日本の染織

木綿、麻、絹の糸を天然染料で堅牢に染め手織りで織った縞や緋の着物をはじめ、古布を裂いて緯糸にした裂織、わずか30センチの糸まで大切に織り込んだ残糸織、丹波布などの織物、そして筒描衣裳など江戸時代末から明治時代の日本各地の染織品を展示します。

## 展示室 2 階

### 〔大展示室〕 日本の漆 —南部・秀衡・浄法寺を中心に

#### 〔第1室〕 朝鮮陶磁器 —茶碗を中心に

15世紀から19世紀に朝鮮半島で生まれた陶磁器の多くは、工芸の精華として今日に伝わっています。柳宗悦はいち早くその美しさを讃え、蒐集・公開に努めました。それらの中から井戸・刷毛目・無地刷毛目・黒釉などの茶碗を中心に展示します。

#### 〔第2室〕 民藝運動と木漆工

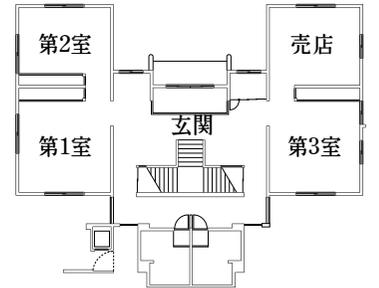
柳宗悦の内弟子として入門した鈴木繁男は、雑誌『工藝』表紙の漆による装幀や、漆絵や榊細工の意匠、また陶磁器の制作などに卓抜した才能を発揮しました。今回はそれらを中心に、民藝運動に参加した黒田辰秋や丸山太郎の木漆工の仕事を併せて紹介します。

#### 〔第3室〕 仏教絵画

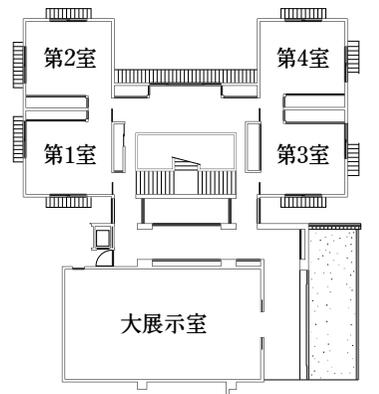
当館は仏教絵画・仏具・和讃など、仏教と縁のある品を多数所蔵しています。一般には仏教美術と呼ばれてきた品も、柳宗悦は仏に奉仕する工芸品と位置付け、精神的に蒐めました。それらの中より鎌倉から室町時代の絵画を中心に展示します。

#### 〔第4室〕 東アジアの木漆工芸 —朝鮮時代の漆を中心に

東洋独特の技術・漆工芸は、日本のほかに中国や朝鮮半島でも盛んに作られました。特に朝鮮半島では、光沢のある貝を漆に嵌め込む螺鈿により、独特な模様の漆工品が生み出されています。本展示室では、朝鮮時代の漆を中心に、東アジアの木漆工芸を紹介します。



〔1階第1室〕海鼠釉白流皿  
江戸時代 19世紀 径 35.0 cm



〔2階第1室〕刷毛目鉄絵草文茶碗  
朝鮮時代 15世紀後半-16世紀前半  
径 12.0 cm